

平成 31 年度 青森学術文化振興財団助成事業報告書

鮫神楽の伝承・発展と地域の振興に関する研究事業

令和 2 年 2 月

青森大学社会学部 木原研究室

## 巻頭言

本報告書は、平成 31 年度青森学術文化振興財団助成事業（地域の振興に係る研究【一般】）において、『鮫神楽の伝承・発展と地域の振興に関する研究』をテーマとした事業の成果をまとめたものである。

本事業では、鮫神楽の今後の伝承・発展と地域振興について考えるにあたり、昨年度の成果をもとにして、新たに 2 つの視点を用いた。まず 1 つ目は、「若者の力」をキーワードとして設定し、1 年間の調査・研究をすすめてきた。この「若者の力」とは、現在、鮫神楽を演じている小学生から大学生、そしてこれから芸能を支えていく可能性がある人物を「若者」としており、また、今後も鮫神楽を途絶えさせないために、さらには鮫町の振興を可能にするためには、「力」が必要であると考え、「若者の力」を掲げた。これについては、鮫神楽連中の畑中大河氏（八戸学院大学 3 年生）への聞き取り調査から見えてきたことが多くあった。現在、畑中氏は新たな取り組みを考えていた。それは、鮫神楽に限らず、神楽に対して熱い気持ちを持っている同年代の人びとに声をかけ、神楽を盛り上げることができる集団をつくり、先々にはイベントなど企画したいというものだった。これこそまさに「若者の力」であろう。

次に 2 つ目は、既に地域全体で芸能の伝承・発展や地域の振興に力を入れ、一定の成果をあげている他地域に焦点を当てたことである。具体的には、島根県益田市の石見神楽である。これについては、鮫神楽保存会会長の証谷伸夫氏に調査の協力を依頼し、本事業の申請者とともに実地調査をおこなった。調査の結果、現地では観光協会、神楽団体、そして、各地域の町内会や自治会、子ども会が一体となって神楽を支え、地域の活性に力を入れていた。この事例は、今後の鮫神楽にとって欠かせない要素であろう。

昨年度に引き続き、今年度も神楽の伝承や発展、そして地域の振興に関する発見が多くあった。本事業の成果は、青森学術文化振興財団の助成金をはじめ、調査に協力していただいた方々、そして青森大学の理解によって得られたものである。心から感謝の意を表したい。今後も地域の方々ひとりひとりの手によって支えられている神楽に注目していきたい。

令和 2 年 2 月 28 日  
青森大学社会学部  
木原 博

## 目次

I 伝承・発展と地域振興 .....	1
①実地調査の内容と成果 .....	1
・ 調査 1 日目 .....	1
・ 調査 2 日目 .....	3
・ 調査 3 日目 .....	7
・ 調査最終日（総括） .....	11
②ワークショップ .....	12
・ 鮫神楽の伝承・発展と地域の振興 .....	14
③若者の力 .....	16
④おわりに .....	18
<b>【資料編】</b> .....	<b>19</b>

# I 伝承・発展と地域振興

ここでは、鮫神楽の伝承・発展と地域の振興について、本事業で実施した実地調査、聞き取り調査、そしてワークショップからみえてきたことを記す。

No	日時	調査場所	内容	調査者
①	令和元年10月11日(金)	益田駅周辺	座談会	梶谷伸夫・木原博
②	令和元年10月12日(土)	益田市中島町	施設見学・神楽訪問	
③	令和元年10月13日(日)	益田市美都町 益田市遠田町	施設見学・神楽訪問	

(表1)実地調査

No	日時	場所	内容
①	令和2年1月24日(金)	青森大学 633教室	①事業報告 ②鮫神楽の伝承と発展について

(表2)ワークショップ

No	日時	場所	語り手	聞き手
①	令和2年1月29日(水)	青森大学 木原研究室	畑中大河氏	木原博

(表3)聞き取り調査

## ① 実地調査の内容と成果

本調査は、鮫神楽の伝承・発展と地域の振興について考えるにあたり、他地域において一定の成果をあげている事例について調べ、今後の鮫神楽に関する取り組みに活かすことが目的である。また、本調査は令和元年10月11日(金)から14日(月)にかけて、鮫神楽保存会会長の梶谷伸夫氏とともに実施した(14日(月)は現地から青森県への移動のみ)。以下では、3日間の調査内容と得られた成果について記していく。

### ・調査1日目

まず、11日(金)は青森県三沢空港から島根県萩・石見空港へ移動した。そ

して、益田駅周辺の宿泊施設へ移動した後、滞在期間中、調査に協力していただく方々との打ち合わせを兼ねた座談会を行った。これには、島根県西部県民センター商工観光部の方2名にも出席していただき、益田市における芸能と観光の面から地域の振興についての興味深い話を聞くことができた。特筆すべき内容は2点あった。まず1点目は、「どこでも石見神楽」というものである。これは、石見神楽が益田市に限らず他地域や他県で演じられる、場所を問わず演じられる、そして、神楽競演大会・夜神楽という神楽のみ披露されるイベントがある、といった上演の機会が多いことを指している。さらに、私たちが利用した萩・石見空港や市内のショッピングモールには、石見神楽のグッズが販売されている。以上から、益田市には石見神楽が溢れており、「どこでも石見神楽」というわけである。

次に2点目は、神楽競演大会・夜神楽の入場料についてである。島根県西部県民センター商工観光部の方の話によると、相場は500円だという。しかし、石見神楽は幅広い人気があり、地域の振興にも貢献しているため、入場料を1,500円に設定したとしても集客は見込めると話していた。これに対して、久城社中の座長である神田惟佑氏と久々茂保存会の島田祐司氏は、「現状では1,500円を払ってもらえるような舞ではない」と話していた。その理由について尋ねたところ、「そもそも神楽とは…」から出発し、それから30分ほど語り続けるほどの理由があった。ここでは、その中から、本報告書に記載することを許可された内容のうちの1つについて記す。端的にいうと「舞のレベルが低い」のだという。

石見神楽の発祥地は、益田市ではなく隣の浜田市であり、そこにある社中や保存会の舞と比較すると、益田市の石見神楽の出来栄は到底及ばないようである。仮に現状のまま入場料を1,500円に設定した場合、2名の舞に対する評価と金額が釣り合わず、恥ずかしくて観客にみせることができないとまで話していた。その詳細について記すことはできないが、益田市では観客に対して神楽を演じる際に「恥ずかしい」という感情を抱くことがあり、また、「恥ずかしくない舞を披露しなければならない」ほど、観客を意識していることは明らかだ。それだけ益田市では石見神楽が人気であり、内外からも注目されているのだろう。

## <小括>

調査 1 日目を終え、早くも地域と芸能についての話を聞くことができた。それは、神楽公演会といった神楽イベントの入場料と神楽の出来栄えに関することだった。観光協会側からすると、仮に現在の料金よりも値上げしたとしても、石見神楽にはそれだけの価値があり、集客も見込めるとのことだった。しかし、一方で社中側の意見としては、現在の神楽の出来栄えと値上げ後の料金では釣り合わないというものだった。もしも、値上げをするのであれば、観客に対してそれ相応の舞をみせる必要があるという。

このように、益田市では観客に神楽を観てもらう時、社中の方々は料金に見合った舞をみせなければならないという意識で神楽を演じているということがわかった。

### ・調査 2 日目

10 月 12 日（土）の午前中から昼過ぎにかけて、台風の影響で悪天候だった。雨は降っていなかったが、強風のため、外出することが困難な状況だった。したがって、当初予定していた益田市内の施設を見学することを中止し、宿舎で待機することとした。

その後、夕方になると天候は回復してきた。そして、18 時過ぎに榎谷氏と調査場所の益田市中島町なかのしまにある中島公民館へ移動した。ここでは、秋祭りが開催され、公民館に隣接する神楽殿で神楽が奉納され、その後、公民館で神楽が上演された。出演したのは、石見神楽久々茂保存会であった。

現地に到着後、私たちはさっそく公民館の中へ入り、久々茂保存会代表の島田氏へ挨拶をした。神楽の上演は 20 時から 24 時までの予定であり、演じられる演目は計 6 演目【「塩祓」しおはらい「八幡」くまそ「熊襲」くまそ「恵比寿」えびす「紅葉狩」もみぢがし「八岐大蛇」】の順番で舞われるとのことだった。



(写真①：中島公民館)



(写真②) 館内の様子

上演が開始されるまでの約 40 分間、館内の様子を観察した。その間、ある違和感があった。それは、館内に集まっていた人たちが私たちに視線を集めていることに気づき、私たちから視線を外した後、仲間うちで何やら話をする光景が何度も見られた。どのような話をしているのかについては不明だが、皆の視線がこちらへ集中していることは明らかだった。

そして、20 時になると、久々茂保存会による神楽の上演が開始された。最初の演目は「塩祓」であった。この時、館内の観客数を数えてみると、約 50 人の観客が集まっていた。年齢層は小学生から大人まで様々であり、家族が多い印象だった。具体的にどこから来た観客なのかについて正確な情報を得ることはできなかったが、大多数の観客が仲良く談笑している様子から、おそらく中島町に住んでいる方々だと推測された。また、公民館の正面に駐車されていた車は 4 台であり、自転車は無かったことから、観客の多くは公民館まで徒歩で来ていると思われる。

「塩祓」が終了し、次の「八幡」が舞われている時、あることに気がついた。それは、すべての観客が神楽を観ているわけではないということだ。特に、小学生は友達と話をしたり、遊んだりして楽しんでいる様子がみてとれた。また、会場の後方には、綿菓子を作る機械が置かれ、子どもたちは自らの手で綿菓子を作

って食べていた。その他にも、飲み物やアルコール類が入れられたクーラーボックスが置かれ、自由に飲むことができた。



(写真③ 綿菓子作り)

22 時を過ぎて「恵比寿」が上演されている頃、私は一旦外へ出た。すると、公民館の裏口で綿菓子を作る機械を洗っているひとりの女性を見かけたので、今回の秋祭りについて話を聞かせてもらうことにした。なお、話の内容については、後ほど文字に書き起こした。

はじめに、私から挨拶をすると、女性からどこから来たのかと質問された。これに対して、青森県から来たことを伝えると、どこか納得した様子が見てとれた。そして、女性は「あー、皆で言いよったんよ。ここじゃあ見ん人らーがおるって」と言った。これを聞いて、私たちが公民館に入り、館内を観察しているときに浴びていた視線の理由が明らかとなった。また、私たちが「よそ者」だとすぐにわかったということは、観客の大半がこの辺りに住んでいる人たちであり、普段から顔を合わせているのだということもわかった。

次に、この秋祭りはどのように企画・運営されているのか尋ねてみた。これについては、次のような回答だった。

この秋祭りは毎年開催されている。中島町の方々は、この時期になると自然に祭りという気分になるようで、祭りで神楽を観るということは特別なことではないという。しかし、中島町には石見神楽の団体がないため、毎年、総会を開催して出演を依頼する神楽団体を決めているという。ちなみに、昨年度も久々茂保存会に出演依頼をしたそう。また、秋祭りは中島自治会、子ども会、そして「イチョウの会」が企画しているという。この「イチョウの会」について詳しく聞く



ことはできなかったが、名称の由来は、公民館の入り口付近にはえている一本の大きなイチョウの木から考えられたものだという。

館内で提供されていた綿菓子や飲み物は、各会がお金を出し合って企画したものらしい。なぜ、綿菓子や飲み物を出すのか聞いてみると、家族連れが多く、子どもたちが飽きないように最後まで神楽を観てもらうためにも、お菓子や飲み物を提供しているとのことだった。

このように、地域で芸能が盛んに行われている背景には、地域の自治会や子ども会がかかわっているようだ。

最終演目の「八岐大蛇」が始まる頃、時刻は 23 時を過ぎていた。しかし、観客の数が減っているようには見えなかったが、なかには寝ている子どももいた。そして、日付が変わった 24 時過ぎに計 6 演目がすべて終了した。帰り際、島田氏と話をすることができた。島田氏は、実は最終演目には出演しない予定だったというが、舞台裏から客席を観たとき、私と桎谷氏の姿をみかけ、急遽、演じることにしたという。そこまで観客を意識しながら神楽を演じているようだ。こうして、調査 2 日目は終了した。

#### <小括>

調査 2 日目において得られた情報を整理すると、まず、地域において芸能を支えるための仕組みがみてとれた。それは、自治会や子ども会、そしてイチョウの会のような地域の住民で構成された組織が一体となって祭りを企画したり、神楽団体に出演を依頼していた。また、祭りの最中は館内にて飲み物や綿菓子がふるまわれていた。これについては、自治会や子ども会で考えられ、子どもたちに最後まで神楽を観てもらえるような仕掛けとなっていた。

また、私たちが公民館に入ったときから感じていた視線は、いわゆる「よそ者」だとすぐにわかってしまうほど、近隣の多くの住民が公民館に集まり、祭りに参加していることを証明するものだった。



(写真④ 八岐大蛇)



(写真⑤ 久々茂保存会)

### ・調査3日目

午前10時、私たちは最初の訪問先である島根県芸術文化センター「グラントワ」(以下、グラントワ)へと向かった。この施設は、平成17年10月に開館された島根県立石見美術館と島根県立いわみ芸術劇場の複合施設である。屋根や外壁は石州瓦であり、それぞれ12万枚、16万枚が使用されているという。



(写真⑥ グラントワ館内)

グラントワでは、年間を通して様々なイベントが開催され、もちろん石見神楽に関するイベントも開催される。梶谷氏は八戸公民館の館長を務めているため、グラントワの館内構造やイベントについて興味津々だった。

そして、11時30分からは益田市板井川にある板井川自治会館で開催される祭りを見学した。13時から始まる予定だったため、周辺を散策した。山の上にある神社の方向へ歩いていると、上から神輿を担いだ人たちが降りてきた。これは「にわか」と呼ばれているものらしく、地元の「やるき人間の会」の皆さんが神輿を担いで歩いていた。



(写真⑦ にわか)



(写真⑧ 板井川自治会館)

13時になると、自治会館で浜田市金城町の青原神楽社中による神楽が始まった。披露された演目は計3演目「八幡」「頼政」「鍾馗」であった。観客のほとんどが高齢の方で、昨日の会場の雰囲気とは大きく異なっていた。それでもお酒がふるまわれ、それぞれ自由に飲食をしながら神楽を鑑賞していた。

祭りは3時間ほどで終了した。私たちは一旦宿舎へ戻り、夜の調査に備えた。

18時30分、私たちは本日最後の調査場所へと向かった。本調査は益田市遠田町の海竜山遠田八幡宮で開催される例大祭を見学した。この例大祭は20時から翌日の午前4時まで開催される、益田市内ではめずらしい祭りだという。なぜなら、夜通しで神楽を上演すると太鼓や笛の大きな音がするため、迷惑となることがある。実際、益田市では苦情が寄せられることがあるという。しかし、このよ



うな状況でも、遠田八幡宮の例大祭は毎年夜通し行われている。それが可能となる理由の一つとして、遠田八幡宮は海沿いにあり、周辺には家が密集していないことがあげられる。



(写真⑨ 遠田八幡宮 入口)



(写真⑩ 例大祭)

この例大祭で神楽を披露したのは、以前にもお世話になった石見神楽保存会久城社中であった。座長の神田惟佑氏の挨拶が終わり、21時前に最初の演目「二神<sup>にしん</sup>柴<sup>しば</sup>」がはじまった。会場の様子は舞台の前に4人がけの長椅子が10脚あり、その左側には焚火が焚かれていた。また、後方には屋台が3店舗あった。20時はそれほど観客は多くなかったが、21時頃になると観客の数は100人は超えていたように思える。昨日の秋祭りと同様に、すべての観客が神楽を観ているわけではなかった。友達と一緒にゲームをしたり、鬼ごっこのような遊びをしている子どもたちが目立っていた。

しかし、舞台の前はそれとは真逆の事態が起こっていた。それは、小学生とみられる子どもたちが舞台上で演じられている舞に合わせて踊っていた。しかも、舞手を使用する小道具と同様の物を持ち、懸命に踊っているのだ。それ以外にも、

舞台に両手をかけ前のめりの姿勢で神楽を観ている子どももいた。そのせいで、長椅子に座っていた私から舞台上が見えづらい時もあったが、それほど子どもたちが目を輝かせて神楽を観ている光景は、石見神楽が益田市に深く根付いている証でもあるように思えた。

私たちは日付が変わり午前 1 時前まで見学をした。これまでに演じられたのは「弓八幡」「恵比須」「塵輪」「天の岩戸開き」だった。本来であれば、午前 4 時まで現地で例大祭の様子を記述したかったのだが、体力が続かず途中で宿舎へ戻った。



(写真① 舞台前で舞う子ども)

#### <小括>

調査 3 日目に得られたことは 2 つあった。まず一つ目は、板井川の祭では、地元の「やるき人間の会」という組織が参加しているということである。調査 2 日目にもあったが、芸能はそれ単体ではなく、地域の住民によって構成された組織が欠かせないということがわかった。

次に 2 つ目は、子どもの自由な参加である。具体的には、前日の事例とは異な

り、子どもたちが舞台の前に立ち、自前の小道具を持って神楽を舞っているというものである。多少、神楽の進行を妨げる場面もあったが、観客が止める様子ではなかった。これは、益田市に石見神楽が根付いている証だろう。

このように、地域の芸能に焦点を当てるとき、芸能だけではなく観客にも目を向ける必要があるということがわかった。

### ・調査最終日（総括）

10月14日（月）は、正午飛行機で現地を発たなければならなかったため、調査を実施することはできなかった。ここでは、機内での榎谷氏と調査内容を振り返った内容について簡潔に記す。

論点となったのは、今回の事例をどのようにして鮫神楽にいかすのか、ということだった。まず、芸能による地域の振興に一定の成果をおさめている益田市と石見神楽を目の当たりにした榎谷氏は、子どもたちの様子をあげていた。特に、調査2日目の中島町の事例を参考にしたいと考えていたようだ。例えば、鮫町で鮫神楽を演じるとき、単に神楽を観てもらうだけではなく、観客が最後まで会場に残ってもらえるような仕掛けや、神楽を観賞している最中も何か楽しみがあると、さらに多くの子どもたちに鮫神楽を観てもらうことができると考えていたようだ。また、そこから鮫神楽に興味を持ってもらい、演じてもらう段階まで進めていくことができれば、後継者問題が緩和され、少しでも鮫町に活気が戻るのではないかと話していた。

続いては、自治会や町内会というような地域の住民によって構成された組織がいかに関わり、鮫神楽とかがわっていくのかというものである。現在、毎年4月に開催されている鮫神楽発表会には、町内会の方々も訪れているという。しかし、中島町の事例のように、観客に対して飲食物を提供するということはない。しかたがって、今後は何らかの形で町内会の人たちにも鮫神楽に参加してもらう試みが必要なのではないか、という話になった。

最後に、神楽そのものについて、石見神楽と鮫神楽では様相が大きく異なっている。そのため、参考にできる部分は少ないと榎谷氏は話していた。しかし、演目によっては、石見神楽と同様の見せ方とはいかないまでも、似たようなことはできるのではないだろうか、という感想もあった。

以上のように、鮫神楽と石見神楽は一見するとまったく異なるが、神楽の伝承や地域の振興においては、参考にすることができることが多くあった。

## ②ワークショップ

ここからは、1月24日（金）に開催したワークショップの内容について記す。

このワークショップは、榎谷氏をはじめ、本学の教員2名にも参加していただき、次の3つの目的を掲げ、開催した。まず一つ目は、今年度の事業内容の報告をすることである。次に二つ目は、木原ゼミに所属している3名の学生は、昨年度から「鮫神楽の芸の習得」をテーマとして調査・研究を続けており、その成果を榎谷氏へ報告することである。最後に三つ目は、益田市での実地調査の内容もふくめ、本事業のテーマである「鮫神楽の伝承・発展と地域の振興」について考えることである。なお、当日の資料は、本報告書の【資料編】に載せることにする。

ワークショップ開催要項  
(平成 31 年度青森学術文化振興財団助成事業)

青森大学社会学部

木原博

【目的】

平成 31 年度青森学術文化振興財団の助成事業「地域の振興に係る研究事業（一般）」において、「鮫神楽の伝承・発展と地域の振興に関する研究」をテーマに調査・研究を行っている。そこで、本ワークショップでは、鮫神楽保存会会長の榎谷伸夫氏を招聘し、八戸市鮫町で伝承されている鮫神楽の現在と今後の発展、そして、地域の振興について考える。

【日時・場所】

令和 2 年 1 月 24 日（金）9 時 30 分～12 時 00 分

青森大学 6 号館 633 教室

【参加者】

青森大学教員 2 名

木原ゼミ履修生

【次第】

- |             |   |           |                      |
|-------------|---|-----------|----------------------|
| ① 9 時 30 分  | ～ | 9 時 35 分  | 開会の挨拶・招聘者の紹介         |
|             |   |           | 【招聘者：鮫神楽保存会会長 榎谷伸夫氏】 |
| ② 9 時 35 分  | ～ | 10 時 10 分 | 助成事業内容の報告（木原）        |
| ③ 10 時 10 分 | ～ | 10 時 30 分 | ゼミ論文報告（小嶋・中村・相馬）     |
|             |   |           | ～休憩（10 分）～           |
| ④ 10 時 40 分 | ～ | 11 時 50 分 | 鮫神楽の伝承と地域の振興について     |
| ⑤ 11 時 50 分 | ～ | 11 時 55 分 | まとめ                  |
| ⑥ 11 時 55 分 | ～ | 12 時 00 分 | 閉会の挨拶                |

以上



## ・鮫神楽の伝承・発展と地域の振興

ここでは、本事業のテーマについてワークショップで話された内容を記す。

まず、今後の鮫神楽にとって重要な点として挙げられたのは、「20代・30代の演者を増やすこと」であった。その背景には、現在、鮫神楽には伝承生と呼ばれる小学生から高校生は10数名、連中が大学生から70歳代の方まで10名ほど所属している。しかし、20代・30代といういわゆる中堅層の人数は4名ほどである。したがって、ある程度の技量があり、なおかつ長く鮫神楽を演じている人はごく僅かであり、このままの状態では10年、20年と時が経てば、20代、30代の演者は増えるが、40代、50代といった熟達者が少ない状況となってしまう。それは現在の問題でもあることは言うまでもない。20代・30代の演者は少なくとも5名は必要だと榎谷氏は話す。

さらに、伝承生である中学生や高校生は、大学進学や就職によって鮫町を離れると戻って来ないという現状もある。なので、今のうちに子どもたちへ鮫神楽のノウハウを習得させ、伝えていく必要があると榎谷氏は言う。

このことについて、石見神楽の久々茂保存会と久城社中の事例から考えてみると、中堅層には鮫神楽の2倍か3倍ほどの人がいる。当事者も今の状態であれば伝承が途切れることはないと話している。このように、中堅層が満たされている背景には様々な理由があるようだ。特筆すべき事項は2つある。それは、小学生にとって、石見神楽はカッコいい存在であり、憧れの気持ちがあるということである。それによって、積極的に石見神楽へと入っていく流れができていくそうである。次に、日常的な繋がりから石見神楽へと入っていくことが多いことである。例えば、仕事での繋がりから神楽へと誘い、人手が増えていくということもあるようだ。

これらを受けて、今後の鮫神楽の伝承について考えたとき、まず、生活における選択肢としての鮫神楽とスポーツを対比し、意味づけをしてみてもどうかという意見が出された。具体的には、鮫神楽（芸能）を選択することによって、どのような良いことがあるのかについて明確な回答を準備することができれば、おのずと若手の人数は増えていくのではないかと考えた。次に、伝承のルートについて考えてみる。これについては、鮫神楽だけを見るのではなく、現在、こういった伝承のルートがあるのか、そして、今後はどの

ルートで伝承していけば良いのかというものである。例えば家族や学校の変化に注目してみると、家族でいえば親から子へ、または兄弟間で伝承されていることが考えられる。また、学校については、少子化の影響から統廃合によって、部活動やクラブ活動で芸能が扱えなくなるということも十分にありえる。

これについて提示されたことは、小学校へアプローチするということである。学習指導要領が改訂されることを受け、小学校の授業（例えば総合学習）に芸能を組み込むことができれば、「地域について学ぶ」という授業テーマのなかに鮫神楽を題材として取り組むことができれば、子どもたちは鮫町について深く知ることができ、なおかつ今よりも更に鮫神楽を認知してもらうことができるのではないかと考えられる。また、この取り組みの強みとして、鮫神楽を教えることができるのは鮫神楽の連中と保存会の人たちだけであり、授業を通じて地域の交流にもなるということである。

以上のような伝承活動は、地域の振興とも強い結びつきがあるということも明らかとなった。それは「20代・30代の若者を増やす」という課題から見えてきた。

梶谷氏は、中堅を担う人数が最低5人いれば問題は少なくなるという。では、そのような対策を講じれば可能となるのか。その一つとして出された意見が「当該地域の人口の1%にあたる人数が他地域から移り住んでくれることが重要である」というものだった。これに成功しているのが島根県であるという。人口減少や若者の流出という社会問題があるなかで、私たちは減った人数分、またはそれ以上増やすことを考えてしまいがちだが、移住政策はそうではなく、地域の人口構成から算出し、人口の1%にあたる人数を増やすという考え方が適切だという。

さらに、本事業では益田市の石見神楽を参考事例として、鮫神楽について考えてきたが、ワークショップでは逆の発想も出された。具体的には、「石見神楽には不可能でも鮫神楽で可能なことは何か」考えることである。要するに、鮫町の強みを再確認して活かしていくということである。これについて梶谷氏は、「テレビも無い時代、鮫神楽は1年に1回の楽しみだった。現在のジャニーズのような感覚」だと話す。益田市が「どこでも石見神楽」であれば、鮫町は「1年に1度の楽しみ」だった頃の感覚を活かして、鮫神楽のお兄さんお姉さんが「身近なヒーロー、憧れ、カッコいい」と思ってもらえるような取り組みが重要だろうと

思われる。そのための1つの手段として、先に述べた小学校へのアプローチは最適ではないだろうか。

### ③若者の力

ここでは、1月29日（水）に実施した聞き取り調査の内容をもとに、鮫神楽連中の畑中大河氏の取り組みについて記す。

畑中氏は、現在、八戸学院大学の3年生である。鮫神楽をはじめから今年で12年が経ち、連中の若手として活躍している。昨年度の事業においても、畑中氏に話を聞くことができたが、今年度は新たな取り組みを考えているということで、再度、話を聞かせていただくことにした。

現在、畑中氏が考案中だという取り組みは、「神楽に対して熱い気持ちをもった若者が集まり、八戸市の神楽を盛り上げる」というものだ。畑中氏は、これに至った経緯をいくつか挙げていたが、その中でも「若者が語る機会」が今後の神楽にとって重要なことであると捉えていた。神楽に限らず、どの分野においても少なからずタテの関係は存在し、全員で何かに取り組む時にはタテの関係を無視することはできない。神楽であれば、自分より年上の人や芸歴が長い人の意見は重要とされる。逆に、自分の意見や考えを頻繁に主張することは難しいと畑中氏は言う。ただ、絶対に不可能だとか、このタテの関係が良くないというわけではなく、タテの関係に加えてヨコの関係も強めることで、今よりも更に良いものができるのではないかというのが畑中氏の考えである。

さらに、畑中氏は神楽の演じるにあたってのプロセスに大きな興味を示していた。それは、なぜ、神楽を演じる決断をしたのか、神楽に対する想いとは一体どのようなものなのかなど、本人の熱い気持ちが重要なのだと言う。

そこで畑中氏が考えたものが「八戸地域における若年層の神楽伝承者の会」である。これはまだ仮称であり、実際に取り組みが進んでいるわけではないようだが、その第一歩を踏み出すことはできているという。以前、隣町の神楽を演じている畑中氏と同世代の人と神楽について語ったことがあるという。そこで意気投合し、神楽に関連する話は長時間にわたって盛り上がったそうだ。そこから、畑中氏の計画は進みだしたという。

この取り組みの目的と活動内容について、畑中氏から送られた資料には次のように記されていた。

#### <目的>

「八戸市の神楽を若年層（U-30）を中心に活動を盛んにしていく」

「後継者不足の解消・軽減」

「他分野で活躍する、または活躍したい、夢を叶えたい若年層との連携・共同」

#### <活動内容>

- ①各団体のメンバー同士での活動報告
- ②イベント企画（資金・スポンサー次第）
- ③SNSを用いた複数の管理人による広告・宣伝・後継者募集
- ④YouTube等の動画投稿サイトでの各団体の行事や企画動画の投稿
- ⑤岩手県域の神楽団体の勉強会・観覧等
- ⑥各団体のイベントを全て記載した「八戸神楽年間行事表」の作成
- ⑦写真集発行（野望）
- ⑧グッズ制作（野望）
- ⑨師匠・有識者の方々との勉強会
- ⑩消滅しかけている、またはしてしまった演目の復活（重要な野望）

畑中氏は上記の10項目の活動内容を考えているようだ。項目⑦、⑧、⑩については「野望」と書かれているため、10項目の活動内容のなかでも特に力を入れたい項目ではないかと思われる。

仮に「八戸地域における若年層の神楽伝承者の会」が発足し、活動することができたとすれば、八戸市において初めての取り組みである。私も本事業で鮫神楽について調査・研究をさせていただいているため、何らかの形で畑中氏の取り組み関わっていく予定である。そして、3つの目的を達成し、鮫神楽のみならず八戸市の神楽の発展と地域の振興を可能にしていきたいと思っている。

#### ④おわりに

今年度の事業においても、鮫神楽に関する様々な情報を得ることができた。また、芸能と地域の振興についても具体的な案や今後のプランを見出すことができたように思える。そして、地域の芸能について考えるとき、もちろん芸能そのものと向き合うことは重要であるが、芸能を取り巻く環境にも注目し、地域全体が芸能を支えていることを忘れてはいけないとあらためて実感することができた。

# 【資料編】

# マサヤンのぐだめざ

聞いてください! ⑫

……榎谷 伸夫

## 島根県石見神楽調査 1

### 嬉しい方との出会い

まさやのぶお

八戸市公民館館長。うみねこ演劇塾、「両部晋コ」語り養成講座を開設し、指導役を務める。八戸童話協会会長、紋神楽保存会会長、演劇集団ごめ企画代表。



神楽調査の冊子



神楽調査



神楽調査

「バツタ」  
これを聞いて、「あり」と思われる方はどのくらいいらっしゃるだろう。終戦後、シベリア抑留から帰八し、商業高校、八戸高校の教壇に立った神亮一先生のあだ名。廊下を厚底のスリッパでバツタ、バツタと音を立てて歩いたことから付けられたとか。授業中、良く響き渡る声での漢詩・漢文の朗読にうっとりしたことを覚えていません。彼は演劇部の顧問でした。舞台本番数日前の稽古場、「ウがんだア、これだば芝居になつてね。やり直し」  
稽古のやり直しは大変でしたが、快感でしたね。

こんなこともありました。  
「先生、小山内 薫の『息子』を先生と演りたいんですが。先生が老爺で、僕が息子で」  
「バガッア、高校生のウがだば無理だ。大人になつてからだ」  
「息子」は4年前、当時の演劇部長が老爺役、僕が息子役で思いを果たすことができました。  
卒業時、進学先の大学がある町の地域劇団を紹介してもらい、4年間演劇漬けの学生生活を送ることになります。つまり、神先生は僕の演劇の原点なのです。

FBのメッセージに  
「僕は神亮一の息子で神英雄と申します。島根県安来に住んでいます。宜しくお願いします」がありました。神先生のご家族のことは存じていなかったのですが、正に青天の霹靂でした。  
石見訪問を知らせたところ、到着の日は津和野で講演があり、安来に戻る途中なので、空港へお迎えにあがるとのこと。降機後、到着ロビーへ。反応なし。出迎えの方々の外へ出て、じっくり観察。いらっしゃいました!! 神先生そっくりの横顔の方が。傍に寄り、小さな声で「神さんでいらっしゃいますか?」「はい」  
車中、ホテルのレストランで懇談。神先生と同じく、饒舌な方でした。島根愛溢れた物言いに圧倒されました。現在安来市加納美術館館長。島根に開いてたくさんの著作があり、ヨシタケコーヒー認証委員も。館内で「安来でヨシタケコーヒーを楽しむ会」を催



し、コーヒーに命をかけた三浦義武の半生、コーヒーの特徴、淹れ方等を講演したという記事もありました。  
あるブログにこんな記述もありました。  
「童画家の佐々木恵末の企画展を開催したので、所蔵の童画を貸していただきたいとのこと。お話を聞きながら、神さんの人柄、仕事や地域に対する思いの深さに共鳴した。時々新聞紙上で拝見していたが、私たちの身近にこのようなお方がおられることを知って嬉しくなりました」  
お父上が童話会々員であったことから、昭和40年代、小6の英雄少年は森のおとき会で口演。4年後の百周年のとき来八して、その時の物語を口演してくれるそうです。  
お礼にイズモリ煎餅と鶴子饅頭を後日送ったところ、「主食に近い八戸の味を楽しんでいます」との礼状が届きました。



# マサヤンのぐだめざ

聞いてください！ ⑬

……榎谷 伸夫



まさやのぶお

八戸市公民館館長、うみねこ演劇塾、「南都昔つ」語り部養成講座を開設し、指導役を務める。八戸童謡協会会長、松浦楽保存会会長、演劇集団ごめ企画代表。

## 島根県石見神楽調査2 石見神楽とは……

大 柴

「なんだこれは？」「権現様は？」「いない!!」「これはもう、スーパー歌舞伎を流石してる!!」  
ユーチューブで確認してはいたものの、生の舞台の、その圧倒的なエンターテインメント性に度肝を抜かれたばなしでした。

益田市1日目、金曜日の夜、2日目、3日目に観させていただく、久々茂社中と久城社中の代表者が食事会を催してくれました。なんと、島根県商工観光部長や観光振興協議会の方々も同席。彼らの、石見神楽への熱い想いが、食事中、延々と続くのです。散会后、店の外へ出ると、神楽囃子が流れていました。近くの神社の祭礼

大 柴

で、神楽を奉納しているとのこと。9月から10月にかけて、毎週末は、招待奉納を含めて、神楽社中は大忙しとのことでした。

島根県は出雲、石見、隠岐の3つの地域から成っています。歴史的に著名な出雲、隠岐はともかく、石見は世界遺産登録の銀山ぐらゐの知識、その中で、石見神楽は異彩を放っています。さすが神話の国だと思いました。

浜田市29、益田市14を初め、石見地方に142社中が存在しています。その多さに驚くと共に、年間を通して、毎週末、10ヶ所ぐらゐで催される神楽の定期公演が、負担にならない形で運営されていることが頷けます。魅力は隣県まで影響し、北広島町28をトランプに、広島県北西部に68社中あり、東京、大阪、京都、北海道にまで及んでいます。

起源は室町時代後期。田楽系をルーツとして能、狂言、歌舞伎などが影響を与えた演劇性豊かな神楽になったとのこと。動舞態の仮面歌舞劇です。神楽面なしで舞う、清めや祓いの採物舞と面をつけた歌舞伎、歴史物を含めた神話劇の二つから成り、軽快かつ激しい舞と演劇性を高めたダイナミックな舞台が観る者の心を揺さぶります。ために、国内だけでなく、世界各地での招待公演が頻繁にあるようです。2日目観た、20時から24時過ぎまで奉納した久々茂社中では、大阪公演のため、次の朝7時に車でお知らせします。■



大 柴

調子の激しく舞う若者が、社中にたくさんいることは言うまでもありません。

主な演目を紹介します。「大江山」「鹿島」「貴船」「鍾馗」「櫻輪」「八幡」「日本武尊」「額政」「熊襲」「黒塚」等々。そして、一番人気は「大蛇」。鼓神楽と共通する「加藤清正」「岩戸」「弁慶」の演目も。えんぶりの「志比寿」もありました。舞台から菓子等を賜うことで、子供たちに大人気の演目です。悪役が登場の時は舞台全体にスモークが。なんと、花火の煙幕使用の社中も。あの手この手で盛り上げるのです。

次回は、実際観た、3社中の様子をお知らせします。■



マサヤンの  
くだめぎ聞いて下さい

島根県石見神楽調査 3  
石見神楽 満喫っ!!

益田市2日目。所謂『村の鎮守様』がそれぞれの集落にあります。久々茂社中が奉納する高津人丸神社へ。小さな神社に併設された集落場。20時から開始というのに、子供たち



久々茂社中大蛇

がたくさん。子供向けの箒や浦あめも用意。正に地区をあげて鎮守のお祭りの雰囲気。演目は「塩敷」「八幡」「熊鷹」「恵比寿」「紅葉狩」「大蛇」。終了は24時過ぎ。「恵比寿」に登場の恵比寿と大黒が紅白の餅や菓子類を投げるのです。子供たちはこれが目当て。もう大賑わい。採物舞の「塩敷」は10分くらいですが、他は20分〜30分。全て、演目の後半は8拍子の極激しい舞。「熊鷹」は途中漫才のようなやり取りを入れて50分の長丁場。そして、最後が「大蛇」。狭い舞台によくぞ4頭の大蛇が、素戔鳴との激しい戦い。圧倒されました。8頭の大蛇が登場する社中もあるとのこと。終演後、大蛇に入った40代の代表者が息を切らしながら、「本当は若い者が入る予定だったが、青森からのお客様ということで僕が入りました。何時もの2倍動きましたよ」との弁。

と。激しい舞と共に、衣裳の華やかさに目を奪われます。  
3日目の午後は、山間の二川村板井川分館へ。典型的な限界集落。元住民や隣の集落からの助っ人が多数。彼らが、お社に詣でた後、分館で浜田市の青原神楽社中が13時から17時頃まで奉納。実際は大変なのでしょうが、長閑な祭り行列に心が癒されました。演目は「八幡」「頼政」「通旭」……。夕方からの夜神楽参加のため中座。残念。  
久城社中が奉納する櫛代賀炬神社へ。屋外にある神楽殿が舞台。広



板井川の祭列

場の周りには4軒の屋台。中央の2つの大きなドラム缶に焚火。勿論、子供たちがたくさん。これまた、村の鎮守のお祭り。の雰囲気はマックス。最近住宅事情等で、夜通しの夜神楽は難しくなったが、ここは21時から朝4時頃までの完全夜神楽。演目は「二神楽舞」「八幡」「恵比寿」「鷹輪」「岩戸」「国受」……。さすがに、「恵比寿」の後、子供たちの姿は減っていくが、10月中旬の寒さの中、一生懸命観ている方々多数。神楽が地域の人々に深く根を下



神楽殿

るしているのを実感しました。カメラの電池が切れ、夏服で寒さに耐えきれなくなった私は、1時間退散せざるを得ませんでした。「大蛇」を観たかった!!



我が南部地方の神楽とは全く違う、神話の国ならではの神楽を満喫できました。また、神社と神楽と地域住民が強い絆で結ばれているこ

とを強く感じた、栞目に値する一日間でした。

是非 YouTube で「確認せよ」。

令和 2 年 1 月 24 日（金）

青森大学社会学部

木原博

### 【事業目的】

本事業のタイトルは、「鮫神楽の伝承・発展と地域の振興に関する研究」であり、2つの目的を設定している。まず1つ目は「若者の力」をキーワードとして、鮫神楽の後継者に関する取り組みや若者と地域との繋がりについて明らかにすることである。次に2つ目は、鮫神楽（芸能）が生きていくことによって、地域の振興は可能なのか明らかにすることである。

### 【方法】

本事業の2つの目的を達成するために、まずは鮫神楽の現在の姿を記録する必要があった。そのための方法として、①鮫神楽の方々へのヒアリング、②発表会などの公演を把握した。次に、芸能と地域の振興について考えるために、芸能を用いた地域の振興や活性に力を入れている島根県益田市「石見神楽」を実地調査した。この調査は榎谷氏と私の2名で実施した。

### 【これまでに明らかとなったこと】

#### ① 「若者の力」に関連したもの

※大学生2名、高校生1名へのヒアリングから

- ・榎谷氏が保存会会長に就任後から公演機会が増え、若い世代（特に伝承生）の活躍の場が増えた
- ・畑中氏（八戸学院大学）は、進路選択の際、鮫神楽を第一に考え、地元に残ることを決意した。
- ・小西氏（千葉県の大学）は、他県の芸能も知ることによって鮫神楽のためにもなると考え、県外へ。
- ・川端氏（八戸水産高校3年）は、消極的な性格を変えるために、鮫神楽の稽古に突撃した。

→今では、人前に出て単独で踊りたいと思えるまでになった。

・若者にとって最も重要な場面は、稽古後・本番後の反省会（飲み会）である。

1. 稽古ではあまり教えてもらえない。反省会の時、突然出てくる「金言」を逃さない。
2. 神楽以外（いわゆる日常生活）では、年配の方と話をする機会が少ない。貴重な経験だ。

※事業申請者が稽古・本番の様子を見学した記録から

<稽古>

- ・小学生や中学生（伝承生）の人数が多い。
- ・「教える/教わる」というよりは、熟達者を見て学ぶ、または遊びながら？自然と覚えていく。
- ・年齢（学年）が近い人同士で「教え合う」場面が多いと感じた。

<本番>

- ・4月上旬に開催される「鮫神楽発表会」は、多くの地域住民・メディアが集まっていた。

※鮫神楽発表会：伝承生が主体で舞を披露する。

- ・鮫町の「ソト」で演じる機会が増えたことによって、鮫神楽に「勢い」が出たのではないか。

② 鮫神楽による鮫町の振興は可能か。

※島根県益田市「石見神楽」の实地調査から

- ・石見神楽は、鮫神楽よりも長い間広域に開かれている芸能。  
→鮫神楽は「鮫の神楽」と呼ばれていたこともあり、もともと鮫町のみで舞われていた神楽。
- ・「どこでも石見神楽」観光協会など益田市全体が力を合わせていた。

例えば... 1. 益田駅周辺のホテル内には、石見神楽の上演予定が記載されたパンフレット

→無料送迎タクシーのサービスもあった。※今回のホテルにはサービスなし。

2. 町内会・青年会・子ども会が団結して神楽団体に出演依頼をして秋祭り開催。

→その地域には神楽団体がないため、毎年、出演依頼をして、神楽奉納を行う。

※これからの鮫神楽について

- ・ 実地調査の結果から、町内会・青年会・子ども会などの協力が不可欠ではないか。
- ・ 町全体で「鮫神楽」を支える仕組みが必要。

例えば... 教育機関での芸の伝達、町内会からの資金など

<キーワード>

伝統芸能 鮫神楽 地域 町内会 仕組み

# 鮫神楽

かつて、藩政時代、八戸藩の物資移出入港として栄え、海猫の燕島をのぞむ鮫に伝わるこの神楽は、修験者によって伝えられた山伏神楽の流れを汲むものである。鮫浦は諸国の船が出入りする藩の港として栄えた。神楽の特徴としては、この自由で開放的な鮫浦の土地柄から、神楽も山伏修験の手を離れて、神楽連中と呼ばれる船大工や漁夫たちの愛好者が中心となり、神楽の古式を守りながら、その形を崩さず、厳しく伝承を伝えると同時に、新たに歌舞伎物と呼ばれる組舞を考案し、民衆の娯楽として綿々と演じられてきたものである。

八戸藩日記の文化5(1808)年7月の項に、「鮫村の虎舞の者共を法靈神社の御祭礼のお供に加える…」の記述がある。また五頭現存する獅子頭のなかに、文化13(1816)年の墨書銘があり、嘉永年間(1848年～)編の台本があることから、鮫神楽の歴史は、それ以前から成立していたと思われる。

現在は、次の三十余种目が伝承されており、その内容は民族芸能を集大成したものと考えてよい。舞踊や民族音楽研究の面からも、見逃すことのできないものである。ただし、現状は、愛好者で編成される神楽連中の高齢化が進み、1971年以來、小中高生を対象にした伝承会を実施しているものの、時代の変化は後継者難をおし進め、現在、連中・保存会が力を合わせてその打破のために悪戦苦闘中である。

## 演目

- ★「四方堂権現舞」★「墓獅子」★「岩扉開」
  - ★「式舞」＝「番楽」「鳥舞」「翁舞」「三番叟」「四季三番叟」
  - ★「神舞」＝「山ノ神」「龍天」「普将荒神」「三宝荒神」「注連切舞」★「女舞」＝「機織」
  - ★「武士舞」＝「志信太郎」「曾我兄弟」★「採物曲技舞」＝「剣舞」「盆舞」「小獅子」
  - ★「組舞」＝「丑若丸鞍馬入」「五条橋千人切」「安宅関勸進帳」「壇の浦録引」「恋路初旅忠信」
- 「四天王大江山入」「羅生門」「関の扉小松姫道行」「鐘巻道成寺」「笠松峠鬼人のおまつ」  
 「葦屋道満大内鏡」「播州皿屋敷青山館の段」「息吹山百足狩」「朝鮮国加藤清正虎狩」

特色として「墓獅子」がある。これは、かつて各神楽で演じられていたが、明治政府の神仏分離令によって廃れ、現在は鮫神楽のみに残されている。まさに神仏混交の名残りをとどめるものとして全国的にも貴重なものである。もう1つ。古来日本で行われていた、歌によって死者を招き、歌によって死者と言葉を交わし、歌によって死者の成仏を表すという、歌が生者と死者による交流の媒体として、中心的な呪術的機能を果たしている形式も忘れてはならない。8月14日・15日、鮫の高台にある浮木寺の墓地で供養のために墓前で舞われる。

## 『墓獅子』 (掛歌)

インヨウホー東方はヤア薬師の浄土の玉の御構ヤ	君が開かて誰か開こふ～ヨ～ヤーハー
インヨウホー西方はヤア弥陀の浄土の玉の御構ヤ	君が開かて誰か開こふ～ヨ～ヤーハー
インヨウホー南方はヤア観音菩薩の玉の御構ヤ	君が開かて誰か開こふ～ヨ～ヤーハー
インヨウホー北方はヤア釈迦の浄土の玉の御構ヤ	君が開かて誰か開こふ～ヨ～ヤーハー
インヨウホー中央はヤア大日大悲の玉の御構ヤ	君が開かて誰か開こふ～ヨ～ヤーハー
インヨウホー茶の木にはヤアいかなる木の葉を取り揃えヤ	天から落ちる玉の水かな～ヤーハー
インヨウホー桜木をヤア打ち割り見れば何もなしヤ	花の種とは何を言ふらん～ヤーハー
インヨウホー白銀をヤア柄杓に曲げて水を汲むヤ	水をば汲まぬ白湯をこそ汲む～ヤーハー
インヨウホー酒呑まばヤア多くは呑むな少し呑めヤ	高天原の色に出るもの～ヤーハー
インヨウホー恋しさに～恋しき人の墓見ればヤ	涙で書いた石の卒塔婆よ～ヤーハー
インヨウホー恋しさに～我が古里を来て見ればヤ	変わらぬものは森と林よ～ヤーハー
インヨウホー恋しさに～恋しき人を来て見ればヤ	見るよりはやくしぼる袖かな～ヤーハー
インヨウホー立つときはヤア我れ老人とは思ひどもヤ	死出の参途は連れが多くぞ～ヤーハー
インヨウホー闇の夜にヤア啼かむからすの声聞けばヤ	生まれぬ先の父ぞ恋しき母ぞ恋しき～ヤーハー
インヨウホー極楽のヤア末木の枝には何がなるヤ	南無阿弥陀仏の六つの字がなる～ヤーハー
インヨウホー我が親はヤアいかなる悪非に我れをなすヤ	親をば問わぬ親に問わるる～ヤーハー
インヨウホー西見ればヤア紫雲はたなびきてヤ	違ひなくは弥陀の浄土に 弥陀の浄土に～ヤーハー



# 鮫神楽発表会新聞 18.4.8

編集・鮫神楽保存会／椋谷 伸夫

1. <sup>けんげんまい</sup>権現舞 畑中大河(連中) 佐藤恭司(鮫中1)



2. <sup>さんぼせう</sup>三番叟 川端奏来(鮫小3)川端ひばり(鮫小2)  
加藤琴葉(鮫小1)馬渡千桜(鮫小1)



3. <sup>ばんざく</sup>番楽 林正太郎(高2)川端 真衣(高1)  
川端玲衣(鮫中3) 佐藤恭司(鮫中1)



5. <sup>ごじょうのぼしせんじんぎり</sup>五条橋千人切 畑中大河(連中)小西佑典(連中)



4. <sup>こ獅子</sup>小獅子 馬渡 悠(鮫小5)馬渡 光(鮫小2)



6. <sup>けんぶたい</sup>剣舞 佐藤恭司(鮫中1) 川端陽澄(鮫小4)



7. <sup>とりまい</sup>鳥舞 川端玲衣(鮫中3) 加藤紫苑(鮫小5)  
高嶋ちはる(鮫小5)中村彩花(鮫小5)



8. <sup>やまのかみ</sup>山の神 畑中大河(連中)



120人を超えるお客様にご覧いただきました。子供たちも練習以上のパフォーマンスを見せてくれました。小西君来場で「五条橋千人切」を特別披露できました。感謝!!  
鮫神楽連中 石戸鉄男／細川 清／石戸昭治／樋口数矢／佐藤義明／宗前 真／畑中大河／小西佑典／原 瑞希



# マサヤンのぐだめざ

聞いてください！⑦ …… 梶谷 伸夫

梶谷伸夫(まさやのぶお)  
八戸市公民館館長。うみねこ演劇塾、「南都音つ」編り養成講座を開校し、指導役を務める。八戸童話会会長、鮫神楽保存会会長、演劇集団ごめ企画代表。



前舞加藤清正虎狩



五棒橋千人切

## 鮫神楽は おもしろい

藩政時代、八戸藩の物資移出入港として栄え、海猫の蘆島をのぞむ鮫に伝わるこの鮫神楽は、修験者によって伝えられた山伏神楽の流れを汲むものです。鮫浦は諸国の船が出入りする藩の港として栄えました。

神楽の特徴としては、この自由で開放的な鮫浦の土地柄の所為か、神楽は山伏修験の手を離れて、神楽連中と呼ばれる船大工や漁夫たちの愛好者を中心となり、神楽の古式を守りながら、その形を崩さず、厳しく伝承を伝えると同時に、新たに歌舞伎物と呼ばれる組舞を考案し、民衆の娯楽として綿々と演じられてきたものです。

往時、春祈禱は久慈方面まで出かけたそうであり、娯楽の少なかつた終戦直後などは、満員の観客のもと、朝から晩まで、2日間に渡って発表会を催したそうです。

鮫のヒーローだったみたいですね。

八戸藩日記の文化5(1808)年7月の項に、「鮫村の虎舞の者共を法靈神社の御祭礼のお供に加える……」の記述があります。

また五頭現存する獅子頭のなかに、文化13(1816)年の墨書銘の頭があり、嘉永年間(1848年)編の台本があることから、鮫神楽の歴史は、それ以前から成立していたと思われる。

この台本は、鮫の廻船問屋佐藤連平が責任者としてまとめたものです。江戸で歌舞伎を観て、大いに感激し、鮫の人たちと感動を分かち合いたいという想いで、舞いや拍子と筋立てをたくみに組み合わせ、削りあげたものでしょう。

「安宅問勅進帳」の巻頭と弁慶のやり取り、「五条橋千人切」の勇壮な丑若丸と弁慶の闘い、「鐘巻道成寺」の山伏と布施屋姫との曲技的な舞、「朝鮮国加藤清正虎狩」での清正と虎の壮絶な闘いに目を奪われます。

この演目の前半部分の虎とホロロ

また五頭現存する獅子頭のなかに、文化13(1816)年の墨書銘の頭があり、嘉永年間(1848年)編の台本があることから、鮫神楽の歴史は、それ以前から成立していたと思われる。

この台本は、鮫の廻船問屋佐藤連平が責任者としてまとめたものです。江戸で歌舞伎を観て、大いに感激し、鮫の人たちと感動を分かち合いたいという想いで、舞いや拍子と筋立てをたくみに組み合わせ、削りあげたものでしょう。

「安宅問勅進帳」の巻頭と弁慶のやり取り、「五条橋千人切」の勇壮な丑若丸と弁慶の闘い、「鐘巻道成寺」の山伏と布施屋姫との曲技的な舞、「朝鮮国加藤清正虎狩」での清正と虎の壮絶な闘いに目を奪われます。

この演目の前半部分の虎とホロロ

（ひよつとこ）・ササラ（子どもたち）とのじゃれ合いが、三社大祭で大人気の「虎舞」のもとになっているんですよ。

現在は、33演目が伝承されており、その内容は民族芸能を集大成したものであり、舞踊や民族音楽研究の面からも、見逃すことのできないものと言われています。

ただし、現状は、愛好者で編成される神楽連中の高齢化が進み、昭和46(1971)年以来、小中高生を対象にした伝承会を実施しているものの、時代の変化は後継者難をおし進め、現在、連中・保存会が力を合わせて、その打破のために悪戦苦闘中なのです。

なお、この発表会は、毎年4月の第2日曜日に鮫生活館で開催しています。

8月号では、鮫神楽のもう一つの特徴「草獅子」に特化して紹介させていただきます。



五棒橋千人切(上)  
安宅問勅進帳(下)

情報誌「UKIPAL(ユキパル)」2019年7月号掲載



# マサヤンのぐだめぎ

聞いてください！⑧ …… 梶谷 伸夫

## 奇習？ 鮫神楽の『墓獅子』



梶谷伸夫(まきやのぶお)

八戸市公民館館長、うみねこ演劇塾、「南無阿彌陀仏」祭り養成講座を開設し、指導役を務める。八戸演劇協会会長、鮫神楽保存会会長、演劇高田ごめ企画代表。

東方は薬師の浄土の玉の御構や

君が開かて誰か開こふや

(真西方南方北方中央の地清は地)

茶の木には

いかなる木の葉を取り捕え

天から落ちる玉の水かな

桜木を打ち割り見れば何もな

花の種とは何を言ふらん

白銀を柄杓に曲げて水を汲む

水をば汲まぬ白湯をこそ汲む

酒呑まば多くは呑むな少し呑め

高天原の色に出るもの

恋しさに恋しき人の墓見れば

涙で書いた石の草塔婆よ

恋しさに我が古里を来て見れば

変わらぬものは森と林よ

恋しさに恋しき人を来て見れば

見るよりはやくしぼる袖かな

立つときは我れ老人とは思ひども

死出の参途は連れが多くぞ

闇の夜に啼かむからすの声聞けば

生まれぬ先の

父を恋しき母を恋しき

極楽の末木の枝には何がなる

南無阿彌陀仏の

六つの字がなる

我が親は

如何なる悪非に我れをなす

親をば問わぬ親に問わるる

西見れば紫雲はたなびきて

遣ひなくは

弥陀の浄土に弥陀の浄土に

中世から近世にかけて歌を契機に亡霊が出現する物語が成立しています。

「墓獅子」の掛け歌でも、「東方は」から「中央は」までの間に、獅子頭に霊が降りてきて、化身として権現に昇華します。

即ち、歌によって死者を招き、歌によって死者と言葉を交わし、歌によって死者の成仏をあらわすという呪術的な役割を獅子頭が果たすこととなります。

「茶の木には」では湯飲みの水を飲み、「桜木を」では花を噛み、「白銀を」では柄杓の水を飲む仕事をします。つまり、獅子頭は供物を手向けられている死者を表しています。

「恋しさに」の三番目の歌では、獅子



頭が幕で顔を覆って泣く仕草で、生者の涙が溢れます。

「立つときは」と「極楽の」では、心配するなという死者の生者に対する優しい思いが、「闇の世に」と「我が親は」では、生者の亡くした父母への深い悔恨の情が読み取れます。

見事に生者と死者による歌の掛け合いになっています。そして最後の「西見れば」で死者が成仏する態が歌われ、この供養が果たされることとなります。

これは、一神教にはない、古くから脈々と受け継がれてきた、鮫神楽だけに残る神仏混交の風習です。まさに日本人ならではの生者と死者の交流、全く日本のこと言つてよいでしょう。

# 芸の習得方法-鮫神楽を事例として-

社会学部社会学科 4年 相馬 蓮

中村 健吾

小嶋 志歩

## 【ゼミ論文の目次】

- 1 はじめに
- 2 先行研究
- 3 鮫神楽とは
- 4 鮫神楽の舞
- 5 鮫神楽の笛について
- 6 結論
- 7 おわりに

### 1. はじめに

小嶋・相馬・中村の3人は、各々の経験から、舞と笛の習得方法について興味が湧き、知りたいと思った。この二つを合わせたものを“芸の習得方法”とし、青森県八戸市鮫町の伝統芸能である「鮫神楽」について調査を行った。

### 2. 先行研究

伝統芸能に付きものの“伝承”という言葉の意味について、ひつじ書房 1995.5 身体の構築学 社会的学習過程としての身体技法（未発選書）207～260 頁に書かれている、小林康正の「伝承の解剖学—その二重性をめぐって—」という論文を用いて調べた。

また、日本演劇学会 2002 「演劇学論集:日本演劇会紀要」 日本演劇学会 127～141,174 頁に書かれている、西郷由布子の「芸の教え方・覚え方—学校的社会と芸能」と、日本演劇学会 2006 「演劇学会集:日本演劇学会紀要 44(0)」 日本演劇学会 87～107 頁に書かれている、「学校で教える民俗芸能」の2つの論文から舞の習得方法について調べた。

ゼミ論文では、この3つの論文を伝承の意味と、芸を学んでいく上での教え方についてどのようなものがあるかを知るために使っている。

尚、私たちは今回“学習者の立場”、“学習者を観察する立場”という2つの立場として同時に調査をしていくという、西郷由布子のやり方を用いた。

### 3. 鮫神楽とは

鮫神楽とは青森県八戸市を活動拠点とする神楽である。江戸時代から記録が残されており、当時は漁夫や船大工により構成されていた。港町ということもあり、歌舞伎といった他の文化の影響を受けた舞も存在し儀式的な神楽と反し娯楽としての面が強い。

現在では、鮫神楽を支える「保存会」、鮫神楽を舞う「鮫神楽連中」、後継者問題に対して設置された小学生から高校生で構成される「伝承会」で形成されている。

### 4. 鮫神楽の舞

2018年7月22日鮫神楽の方々と顔合わせを行った。その日に開催される「さめ浜まつりのパレードに急遽「虎舞」と呼ばれる演目の格好をし、参加することとなった。結論から言うと観客からは「今年の虎は元気がない」や連中からは「猫みたい」と言われ散々だった。しかし練習をさせてもらえる約束をし、次回の「さめ浜まつり」に参加することになった。

練習に関しては、連中の松井氏に指導していただいた。我々が指導していただいた練習の手法をあげると。

- ・見ながら倣う
- ・客観的に見る
- ・動画を撮ってもらい自分たちの動きを見る
- ・指導者に手を取ってもらい虎の動きを見に感じさせる。
- ・簡単なアドバイス（論理的なアドバイスもあるが、こうする、そうだ、違うなど）

2019年の「さめ浜まつり」のパレードでは連中の方に先導されることはあったが、基本を練習したおかげで動きに余裕ができ、アドリブを組み込むことができた。特に小さな男の子に泣かれてしまった時は嬉しかった。逆に練習していなければアドリブなどパレード中に自由な動きはできなかった。



鮫神楽では最初「三番叟、鳥舞、番楽」の3つを覚える。この3つには鮫神楽の各演目の舞における足さばき、調子、リズムの取り方という基本があるから。

鮫神楽の子供たちはスマートフォンで動画を撮影していて、親が自宅で練習している。鮫神楽で集まって練習する時間が限られているからだ。

鮫神楽の舞で上手い下手を聴いたところ、舞い手側は最初演目の演奏に合わせて舞う。その次は演奏側がタイミングを取りやすいように舞い手側が演目の盛り上がるところで体を振り、大きくやるとのこと。そうすることで演奏と舞い手との一体感が生まれ合格だと言っていた。この事からこれといった完成系がないのかもしれない。

## 5 鮫神楽の笛について

- ・ 鮫神楽は7本調子篠笛を使用している。



横笛なので音を出すのが難しい

- ・ 宗前氏は笛から音を出す練習を夜一人で海に行き練習していた。
- ・ 使う指は右手、左手それぞれの薬指を固定して右手、左手の人差し指、中指の4本を動かして使う。これはすべての演目に共通している。
- ・ 鮫神楽には楽譜はなく、最初演目のメロディーを聴き、指を見て覚える。そのあと1拍

子のところを2拍子にするところを覚える。高校生の子はスマートフォンで撮影して自宅でスローモーションで再生し、それを見て練習する。

- ・ 演目で1つ覚えればあとは覚えるのが早い。
- ・ 上手い下手は聞き手が決めること。

## 6 結論

### ① 舞の習得方法

鮫神楽は舞を見るということをお初めにしなければならぬため、舞の動画を撮影し、それを見ながら練習するということが分かった。鮫神楽では皆で集まって練習をする時間が比較的少ない。そのため、動画を撮影することで、家でも各自練習するという方法を用いている。実際に相馬と中村も虎舞を学んでいく中で、鮫神楽保存会の方に動画撮影をしてもらい、それを見て練習するという習得方法を行った。身体全体を使い、頭はほとんどの間下げると、迫力のある虎舞になることが分かった。

また鮫神楽では、例えを挙げて指導するという方法はとられていなかった。

### ② 笛に習得方法

鮫神楽には笛の楽譜はないため、演奏を学ぶ際には笛が吹ける人の近くに行き、メロディーを聞きながら指使いをみて学ぶことが分かった。笛の場合も、笛を吹いている人の動画撮影をし、各自で何度も見ながら練習するという習得方法を行っており、舞の習得方法と共通していることが分かった。

そして、笛は聞いているものが上手か下手かを決めるという考えがあった。

### 6 おわりに

鮫神楽において、芸を習得するためには、自分で見て聞いて覚えることが一番大切だということが分かった。そして、それぞれの芸を磨くことも勿論大事だが、お互いに信頼関係を築くことも大切であると感じた。